

世界詩人全集

5

プーシキン
レールモントフ 詩集
マヤコフスキー

木村 浩 小笠原豊樹 訳

新潮社

世界詩人全集 5

プーシキン

レールモントフ詩集

マヤコフスキー

昭和四十四年九月十五日印刷
昭和四十四年九月二十日発行

価五〇〇円

訳者

木村 浩
小笠原豊樹

発行者

佐藤 亮一

発行所

株式会社 新潮社

郵便番号一六二

東京都新宿区矢来町七一
電話(03)二二 振替東京八〇〇

印刷所 大日本印刷株式会社
製本所 新宿 加藤製本所

(乱丁、落丁本はおと
りかえいたします)

目次

プーシキン

願ひ

歌ひと

さらば 心かわらぬ檜の木だちよ！

別れ

チャダーエフへ

村

望みにもえし日々は去りゆきて

小鳥

なにもかも終ってしまった

海へ

ペ・ア・オーシボヴァへ

アンナ・ケルンへ

生活がきみを欺いても

野末にのこる名残りの花は

七

八

九

二

三

四

六

九

二〇

二

二六

二七

三

三三

シベリアの鉾山の奥ふかく

歌うな 美わしき乙女よ

ぼくはあなたを恋した

詩人へ

悲歌

われはおのが奇しき記念の

像をうち建てぬ

パフチサライの泉

レールモントフ

トルコ人のなげき

モノローグ

カフカース

即興詩

初恋

天使

***へ

三三

三六

三五

三六

三七

三八

四〇

二

三

三

四

五

六

七

九

空と星
 いや ぼくはバイロンじゃない
 望み
 ふたりの巨人
 水の精
 帆
 瀕死の剣闘士
 ボロジノ
 詩人の死
 パレスチナの小枝
 ぼくらは別れてしまったけれど
 不安にかられて行く末を眺め
 きみが歌えば
 短剣
 カズベックへ
 想い
 詩人

三
 三
 三
 六
 六
 一〇
 一〇
 一四
 二二
 二六
 二九
 三〇
 三三
 三三
 三四
 三七
 三〇

おのれを信ずるな
 祈り
 一月一日
 退屈で物悲しい
 なにゆえに
 ア・オ・スミルノヴァへ
 流れ雲
 さらば 汚れたるロシアよ
 祖国
 いや きみではない
 ぼくは独りで旅に出る
 予言者
 マヤコフスキー
 ぼく
 ズボンをはいた雲
 ぼくらの行進曲

三三
 三六
 三七
 一四
 一四
 一四
 一四
 一四
 一五
 一六
 一六
 一五
 一五
 一五
 一五
 一五
 一五

喜ぶのはまだ早い

二八

ぼくは愛する

三〇

五月一日

二四

セヴァストーポリ＝ヤルタ

二四

街

二五

☆

解説

二六

年譜

二六

プー
シキン
詩集

木
村
浩
訳

願 い

ゆるやかにわが日々は過ぎゆけど
幸うすぎ恋の哀しみは　ひと刻みごと
なえしころにあふれ

おろかなる**狂気**におののく

われは涙ながさん　涙こそわが慰め
されば　われはかたくなに口を閉じ
おのが嘆きのつぶやきも洩らさじ

愁いにかられしわが魂たまよ

汝ながうちにこそ　苦にがきよろこび

ああ　この世の夢よー　飛びゆけ

われは汝なれを惜しまじ

うつろなる幻よ　闇に消えされ

われに尊きは　恋の苦しみ

※リツイエ時代の同級生の
姉エカチェリーナ・バク
ーニナ（七九五―一八六九）
に対するプーシキンの片恋

いざ 恋ころもて死なんものを！

Heaven

から生れた詩で、死後に発
表された。

歌 び と

夜の闇の茂みのなかに

愛と哀しみの歌びとの声を

きみは聞いたでしようか

野辺が朝露にまどろむとき

ものうげな笛の単調なひびきを

きみは聞いたでしようか

人気なき森の奥ふかく

愛と哀しみの歌びとに

きみは逢ったでしようか

その涙のあとに 微笑みに

愁いに沈んだ眼差に

きみは逢ったでしようか

愛と哀しみの歌びとの

静かな声に耳を傾けながら

きみはそつと溜息をついたでしようか

森かげでひとりの若者を見かけ

輝きの失せたその眼差に逢いながら

きみはそつと溜息をついたでしようか



さらば 心かわらぬ檜の木だちよ！

さらば のどかなる野辺の世界よ

束の間に去りゆきし日々の

Teeru

はかない愉しみよ！

さらば かずかずの喜びもて

わたしを迎えたトリゴルスコエの里よ！

お前の甘いところを知ったわたしは

どうしてお前を見棄てられよう？

わたしは想い出だけを抱きしめて

ここはお前のもとに残していこう

できることなら（これは甘い夢かも知れぬが！）

わたしはお前の懷へ帰ってこよう

菩提樹のゆたかな茂みに戻ってこよう

友誼に厚い自由と歎びと

美と智を尊ぶわたしは

ふたたびトリゴルスコエの丘を訪ねよう

Простите, верные дубравы!

※ブーシキンは一八一七年七月、母の領地たるブスコフ県のミハイロフスコエへおもむき、隣り村のトリゴルスコエの女地主ベ・オーシボヴァ（一七八一—一八五九）の邸をしばしば訪れた。この辺りは典型的なロシアの風景で、ゆたかな森と湖にかこまれたそのすばらしい眺望はブーシキンに生涯かわらぬ強烈な印象を与えた。この時はその年の八月ベテルブルグへ戻るとき、オーシボヴァの記念帖へ書いたもの。発表されたのは死後になってからである。

別　　れ

独り別れのときに　われらが守り神は
わが詩句に耳を傾けぬ

リツエイの日々の　心やさしき友よ

別れのひとときを　君と過さん

ともに語りし年月は疾く過ぎ逝きて

心許せし友どちの交わりも終りを告げぬ

さらば！　わが友よ　神の守りあれ

自由とアポロに　永久に仕えよ！

君こそはわれに縁なき恋を知りたまえ

望みと歎びと慰めの恋を！

君の日は　夢のつばさもて

幸多き静寂のなかを飛びゆかん！

さらば！　われは激しき戦さの庭にても

※ブーシキンのリツエイ時
代からの親友キューヘリベッ

のどかなる故里の小川のほとりにても

常に心変らぬ君が友

われは祈る 君がなべての友どちに幸あれ、と。

(されど わが祈りを 運命の女神は聞き給うや?)

Pasajka

チャダーエフへ

愛も 望みも 静かな誉れも

その偽りもてわれらを慰めしは束の間

夢のごと 朝霧のごと

若き日の愉しみは消えさりぬ

されど われらが胸には望みが燃える

避けがたき権力のもと

われらは心をおどらせつつ

祖国の呼びかけに耳を傾けん

ケル（一七九九—一八四六）にあてられた詩。キエフ・リベックケルはデカブリストの乱に加わり、長い獄中生活のあと、流刑地で死んだ。彼もロシア・ロマン派の詩人であった。

心変らぬ逢う瀬の時を

恋する者が待ちのぞむごと

激しき期待に疲れながらも

われらは聖なる自由の時を待ちのぞまん

われらが胸に自由の焰が燃えるかぎり

正義をのぞむ心が生きているかぎり

わが友よ 美わしき魂のたかぶりを

われらは祖国にささげん

同志よ 信ぜよ いつの日か

心ときめかす幸せの星がのぼらんことを

その日こそ ロシアは夢からめざめ

うち倒されし専制政治の廃墟のうえに

われらが名前の記されんことを！

K Yaaduey

※ピョートル・チャダーエフ（一七九四—一八五六）はプーシキンと親交のあった教養たかき士官で、一八三六年に発表した「哲学書簡」は有名である。その中で彼は反動的国粋主義を激しく批判し、ニコライ一世から「狂人」とみなされた。この詩が完全な形で発表されたのは実に一九〇三年になってからであるが、当時は人びとの手によってコピーされ、広く流布された。

村

人気がない村里よ　ぼくはお前にあいさつをおくる
安らぎと労働と靈感の隠れ家よ

お前のもとは　ぼくの日々の見えざる流れが
しあわせと忘我のうちに過ぎさっていく

ぼくはお前のもの　ぼくは罪ぶかい女の館を
贅をこらした宴や悦樂をみすてて

檜の林のささやきを　野辺の静けさを
物思いに耽ける気ままな自由を　選んだ

ぼくはお前のもの　ぼくは愛でる　お前の小暗き園を
美わしき花々がそよ風に揺れるところ
かぐわしき乾草の散らばる草原を

明るい小川が茂みのなかにざわめくところ